episode 27　欠けているからこそ気づくことができる気持ち

投稿者　田中 美由紀 さま（大阪府）

いつの頃からか記憶は定かではないのですが、私の両親は毎日喧嘩ばかりしていました。
私はそんな光景を見るのが嫌で、「長女の私が小学校を卒業するまでは一緒に」と決めていた両親が、
その春に離婚した時も泣くこともせず、いがみ合う姿を見ないですむことに安堵していました。
母がいなくなっても悲しくも寂しくもない、そんな自分は冷たい人間なのだろうか、
何か大事な感情が欠けているのだろうかと思いはじめた頃、この本に出会いました。

この本に教えてもらったこと。それは、欠けているからこそ気づくことができる気持ち。
手の込んだ料理ではないけれど、炊きたてのご飯とお味噌汁がある食卓。
新しい服ではないけれど、毎日、洗濯したての洋服が着られること。
「母」という共に暮らす家族は欠けてしまったけれど、私が自分に欠けていると思っていた感情は、
「兄弟3人を引き取り、必死で育ててくれていた父によって満たされていたのだ」と気づくことができました。

欠けていること、足りない何かに悩まなくても、無理に補わなくても、幸せな何かに気づくことができる。
足りないからこそ味わえる喜びも悲しみも人生の一部。
欠けている自分を受け入れよう、前むきにとらえようと思わせてくれた本との出会いでした。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2019」投稿作品より

『ぼくを探しに』
シェル・シルヴァスタイン 作
倉橋由美子 訳
講談社　1977年

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

生きていくことは何かをなくしていくこと

真っ白な画面に黒い線画だけで表現された『ぼくを探しに』は、世界でもっともシンプルな絵本でしょう。作者のシェル・シルヴァスタイン氏は一貫して、「生きていくことは、何かをなくしていくこと」というテーマをシンプルな表現で描こうとしていたと、作者が急逝した1999年、「月刊MOE」で長田 弘氏(2015年没)は述べています。

日本では、1976年に発行された翻訳書『おおきな木』によって、その名は一躍有名になりました。

作者が46歳のとき、母国で出版した『ぼくを探しに』は、たちまちベストセラーとなり、翌1977年には日本語訳書が出版されたのです。本作もまた、50年近く読み継がれている名作なのです。

シルヴァスタインの肩書は？

シルヴァスタイン氏は絵本作家に留まらず、漫画家、音楽家、劇作家、詩人としてもその名を轟かせた才能豊かなアーティストでした。子どもの頃から絵を描き、文章を書いていた少年は、やがて大学で美術を学ぶも退学となり、その後、大学を移って母国語(英語)を修めます。

1953年に徴兵され、朝鮮戦争に向かったことが、才能の開花となるのです。軍人向け新聞「スターズ・アンド・ストライプス」の職員に選ばれ、漫画を描くことになったのでした。1955年には、同新聞社から初の漫画本『ひとやすみ』が出版されます。本書は後に『さあ起きろ！』と改題され、東京で印刷、再版されました。

同年、休暇でシカゴに帰ったシルヴァスタイン氏は、雑誌に漫画を描く仕事を手に入れます。これが成り上がりの出版者ヒュー・ヘフナー氏の目に留まり、創刊まもない「プレイボーイ」誌に漫画制作の依頼を受けて、それから25年間、同誌で作品を発表し続けたのでした。

また1959年、29歳のときには、アルバム「危険なジャズ」で歌手としてデビューし、シンガーソングライターとしての頭角をメキメキと発揮するのです。

立役者は世界的絵本作家！！

漫画家であり、シンガーソングライターのシルヴァスタイン氏を絵本作家の道へ引きずり込んだのは、彼の友人である作家トミー・ウンゲラー氏でした。『すてきな三にんぐみ』『ゼラルダと人喰い鬼』を代表作として、現代でも世界的に愛されているロングセラー作家です。

ウンゲラー氏に引っ張られてアーシュラ・ノードストロム氏の事務所にいくと、そこでもウンゲラー氏と同じことを言われたシルヴァスタイン氏は、「子どもの本が書ける」と納得したのでした。そして、伝説の編集者ノードストロム氏のために描いた『人間になりかけたライオン』で、1963年に絵本作家としてデビューします。その翌年に発表されたのが『The Giving Tree』でした。

作者と訳者の人生論ともいえる作品

原題『The Missing Piece』(あるべきなのに足りない部分)を日本語訳にして紹介したのは、作家の倉橋由美子氏です。反リアリズムと非私小説なスタイルを特徴とする倉橋氏が、はじめて翻訳に挑んだ作品が『ぼくを探しに』でした。

倉橋氏は、歯科医師の父親のもとに生まれ、自身も医師を目指して医学部を受験しますが失敗し、短期大学歯科衛生士コースに入学します。国家試験に合格し、歯科衛生士としてアルバイトをするも一転、父親の反対を押し切って明治大学文学部に入学し、大学院研究科進学と同時に作家活動を開始するという人生を歩んでいるのです。

作者と訳者の人生論ともいえる作品です。

文献

1）マイケル・G・ボーガン著，水谷阿紀子 訳：「おおきな木」の贈りもの～シェル・シルヴァスタイン，文溪堂，東京，pp.9-110, 2010.
2）月刊MOE編集部：追悼特集シェル・シルヴァスタイン，月刊MOE 21(9), pp.37-43, 1999.